

令和2年度第2回半田市環境基本計画策定委員会議事録

開催日時	令和2年10月2日(金)	午後2時～午後4時
開催場所	半田市役所 大会議室	
会議次第	【議題】 1 あいさつ 2 議事 ・ 第2次半田市環境基本計画素案の中間報告について (1) 半田市環境基本計画骨子案について	
出席委員	千頭聡、藤田純代、木下裕義、田島晋矢、大場渉、森啓貴、梶川幸夫、野口恒雄、榊原靖、安達典孝、澤田和孝、滝本均 ※敬称略	
事務局	環境課長 大嶽、環境政策担当副主幹 鳥居、環境政策担当 青木、環境保全担当主査 森下、(株)地域計画建築研究所(アルパック)名古屋事務所長 畑中、植松	
その他	クリーンセンター所長 加藤	
次 第	議事概要	
1 あいさつ	—委員長あいさつ—	
===== 2 議事 ・ 第2次半田市環境基本計画素案の中間報告について (1) 半田市環境基本計画骨子案について	===== (事務局：環境課長) 議事の前に、前回の策定委員会を終えてから委員のみなさんからいただいた意見に対する回答をさせていただきたい。 (事務局) 一つ目は、運営に関する事項で、「環境をテーマとする委員会で資料を紙で配布するのはいかがか」という意見をいただいた。これに対しては、会議用の貸し出し用のタブレット等の配置できるまでもう少しお時間をいただきたい。また、「それを前提にメールやウェブ会議を用いた中間議論等があっても良いのではないか」という意見をいただいた。次回の委員会の前にはメールや郵送等にて資料の事前配布を行い、議論していきたいと考えている。 二つ目は、実行体制に関する事項で、「計画として掲げる項目の多さに対して、実務部隊となる市役所内の事務局の下の組織・担当が必要であり、組織横断的な取組になろうと推察される。次回委員会では課題ごとのチームとして出席し計画素案に対しての意見交換の場となれば良い」との意見である。第3回委員会においては、庁内作業部会の出席も検討したい。 三つ目は、「愛知県のウェブサイトの水素ステーションの建設場所として、33番の符号が付されている。調査中となっているが、これについて市役所との関連を知りたい」との意見であった。把握していなかったため、県へ確認問い合わせをしたところ、日本エア・リキードが民間主導	

で令和4年春に水素ステーションの設置を目指している、とのことであつた。その後、日本エア・リキードからも市環境課に報告があつた。

(事務局：環境課長)

以上です。ここからは、委員長に議事進行をお願いしたい。

(千頭委員長)

この会議は、なかなかオンラインで実施するわけにもいかないなので、ご了解いただきたい。

議題 第2次半田市環境基本計画素案の中間報告について(1)「半田市環境基本計画骨子案について」事務局に説明を願う。

内容の一字一句より、半田市はゼロカーボンシティとして宣言しているので、今後目指す方向としてそれぞれのお立場から意見をいただきたい。

(事務局)

【資料1説明】

(千頭委員長)

ありがとうございました。まず、現状と課題の認識、計画改定の方向性の部分について、意見・質問はあるか。

半田市にとって農地は環境面から見ても大きな意味があるので、農地の事についても触れるべきではないか。

(野口委員)

岩滑に限って言うと、専業農家の高齢化で跡継ぎがないということがある。稲架掛けで稲を干しているところが1軒だけあるが、その方も高齢になっているので、生産組合や観光協会などが協力し、景色を守っていきたいという話を聞いている。

(安達委員)

市のバイオマス産業都市構想やゼロカーボンへの取組を、凄いことをやっているにも関わらず、全く知らない市民がほとんどであり、大きな課題だと感じている。資料に入れる必要はないが、市民にこれだけ積極的に取り組んでいるということを知らせる方策を全体の動きの最初に盛り込むべきではないか。

(千頭委員長)

大変重要な意見だと思う。ゼロカーボンシティは行政だけでなく、市民もやっていかないと達成できない。

(滝本委員)

ゼロカーボンシティの表明は、今年の3月議会の前に市長の施政方針演説の中で出している。環境大臣からの呼びかけに応じた形であり、全国の市町村の中で88番目と、県内でも早い方であつた。ただ、具体的な対

策が国も大きな自治体も示されていない。半田市としても環境基本計画の中でゼロカーボンに向けた具体的な対応策が出来れば記載したいと市長も言っている。表明に対する市民に対してのアナウンスが不足しており、反省したい。

バイオマス産業都市構想については、半田市は再生可能エネルギーに対してどの事業者に対しても普遍的に施策を行っていくと思われがちだが、実際は農林水産省の補助金を活用した特定の事業者を想定した事業であり、全ての事業者を対象とした計画ではない。既に事業化がされている。いずれにしても計画のアナウンスが不足しており、反省したい。農地については、環境面で様々な良い影響や価値観があると思うが、後継者問題、収益の問題、新規の就農者増加など、産業としてこれからのあり方に苦戦している。現在、農林水産省の「人・農地プランの実質化調査」により、市内全ての農地地権者に対して農地の活用に関する調査を行っており、農業を続けるのであれば貸しても良いという回答が得られれば農業をしたい方とのマッチングを行う予定である。美しい農村風景やそこから得られる快適な環境などの環境側面だけではとらえきれない所があり、産業としての農業施策をここでどう取り上げるべきか悩ましい所であるので、ご検討いただければと思う。

(千頭委員長)

農業サイドは法律も変わり、例えば、利水施設も農業者だけでなく地域が管理できる、と農業サイドも方向転換を図っている。農業だからといって農家だけに任せるとかいう話で今は全く無くなって来ている。

(滝本委員)

半田という地域において再生可能エネルギーについては、極めて大きな収益が出つつある。大場委員から見て、半田地域の再生可能エネルギーが持っている可能性はどうか。

(大場委員)

私どもは川崎町でバイオマス発電所をやっており、石炭5%、木質チップ95%、PKS(油ヤシの種の殻)を燃焼している。カーボンニュートラルとして、再生可能エネルギー認定を受けている。輸入資材を運ぶ大型船が入れる衣浦港、愛知用水からの工業用水、元々製紙会社があった立地であり、燃料や原料の運搬に長けた業者がいるなど、半田市のロケーションは産業誘致に強いポテンシャルを持っている。

現在、電気は固定価格買取制度(FIT)として売却しており、半田産の電気としては売れていないので、市民に再生可能エネルギーとしてアピールできない。模範的にどこの電気を使っているのか分かるよう技術的な整理がされてきているが、燃料が高いので今の電気料金に10%程度プレミアムが付くのが今の実態である。

(木下委員)

知多半島全体でみると、半田はバイオマス、南に行くほど太陽光を活用しており、再生可能エネルギーで出来る範囲で十分対応されているとの

認識をしている。環境とコストは非常に相反しているので、いかにコストを抑えながら環境面を変えていくか、両者がうまく一致するような仕組みづくりが大切であると考えている。

(千頭委員長)

サミット半田パワー(株)は系統に繋いでいるが、半田市内にはそれ以外にも活用しうる再生可能エネルギーの発電はある。また、これからも出てくる可能性はあるので、それを積極的に活用するか、今後の方針に関わってくる。制度的な制約はあるが可能性はある、そこまでは踏み込んで書かれていない。

(野口委員)

2～3年前に半田池が埋め立てられ太陽光発電設備が設置された。現在稼働して発電しているのか。これからも拡大していくのか。

(事務局)

埋め立てられたことは認識しているが、活用方法までは把握していない。

(澤田委員)

半田池の太陽光発電については、竣工にあたり県に申請いただいております、運用開始しているということを確認している。規模ははっきりと分からないが、周辺でもいくつかの太陽光発電設備がそれぞれ別の業者で進んでいる状況は把握している。

(千頭委員長)

基本的には FIT を使って電気を売却しており、単独で活用しているわけではないのではないか。

今までの議論を受けて、バイオマス産業都市構想が特定の事業者を対象としたものであるのならば、計画改定の方向性に記載するのはおかしいのではないか。

(榊原委員)

これを機会と捉えて、ますます施策として進めていくという意思表示として捉えるということならば良いと思う。

(事務局)

民間事業者と共同で事業を進めていくと平成 28 年に表明したもので、市としても計画に記載することでこれからも推進していきたいと考えている。

(千頭委員長)

地域でエネルギー源として使用できる資源は何か、半田が持っている特徴は何か、と考えた時にいくつかあるのではないかと。一つは畜産廃棄物であり、家庭から出てくる生ごみもある。まさにゼロカーボンシティを

目指すのであれば、今、利用出来ていない地域の資源である畜産廃棄物や家庭生ごみを再生可能エネルギー源として活用するという方向があるのではないか。

(事務局)

ごみ減量にも繋がると考える。

(安達委員)

ふん尿を原料にしてメタン発酵すると、必ず色々なものが出る。消化液が出てきて、消化液の始末がとても大変で引き取り手がない。どこかに有償で処分を依頼する状況になりかねない。そのあたりも技術の進歩で解決している問題なのか。

(事務局)

消化液についても民間事業者から提案があり、実際に農地に撒いて影響はないのか、効果があるのかということを実験的にやっていく。肥料として使ってもらえる農地を探して、どうしても無い場合は下水道に流すしかないが、なるべく使っていただけるような方向で、検討しているところである。

(千頭委員長)

量のバランスの問題もあるので、全量が還元できるわけではないであろう。例えば、隣の大府市は一般廃棄物も含めてバイオマス発電を始めているので、可能性としては選択肢の中にあるかも知れない。

次に、基本理念、環境像、5本の柱について意見や質問はあるか。

「共創（きょうそう）」という言葉を使った思いはどのあたりにあるのか。

(事務局)

前回の総合計画から「協働」という言葉が使われ始めた。「働く」という字が行政側から使うと、働かされるというようなイメージもあり、そういった点も反省点として、共に創りあげるところから「共創」としている。

(榊原委員)

これを実現するための施策やチェック体制などを具体的に、従来よりも分かりやすくして欲しい。具体的にどうすれば良いのか分かりにくい課題もある。その辺りをしっかりフォローしてもらえると良い。

ゼロカーボンが一番目に持って来ているところの意図はどのあたりにあるのか。2050年、これから30年後に本当にゼロにするつもりならば相当な覚悟がいると思う。それに値する施策の展開案を作らないといけない。

(千頭委員長)

1-1の所を見ると、布石を打つと書いてある。確実な布石を打たなければ

ばならないので、これから中身が問われる。

(大場委員)

前はひらがなで「まち」としていたが、今回は「都市」という表現となっている。言葉にまちの発展のイメージ、30年後の半田が経済的にも発展する、という背景などがあれば教えて頂きたい。

(事務局)

これからも確実に都市として成長していく、というイメージを持っている。そのような所から「都市」という表現をした。

(澤田委員)

「零」からスタートして都市とくると、少し冷たい感じがした。前回のほうが市民に対して盛り上げるような空気が感じられた。

(千頭委員長)

言葉の使い方次第でイメージが変わってくる。零炭素という言葉はどうか。

(安達委員)

ゼロカーボンにしても、ここに出てくる色々な言葉や具体的な内容は、市民としてあまり認識できていない。このまま動き始めると、言葉だけがふらふらして、ゼロカーボンがどういうことか認識できない。地球温暖化についても、大雨の頻度がこんなに高いのはどうも温暖化の影響らしい、と最近少し地に足が付いてきて、徐々に市民の中にイメージが入ってきているが、そこから温室効果ガス削減の具体的な話になると浸透していかない気がする。ゼロカーボンの社会を目指していくことを、市民にパンフレットなどで啓発しても頭に入らないのではないかと。この計画を10年進めていく中で、小学生や中学生などを対象に環境教育を徹底的にやれば、30年後には環境のことを良く分かった30~40代が市内にたくさんいるとなると、それなりのことが出来ていくのではないかと。真剣かつ深刻に教えていくことに力を注げると良い。今は中々進まなくても、その人達が社会に出て動き始めた頃に、起爆剤になるような気がするし、そこに期待したい。今はいくら説明しても頭に入らないし、ピンとも来ない。計画を進めるにあたって、具体的な数値目標を達成させることとは別に、「みんなこれは大切だからよく知っていてね」と並行してやっていければ良いのではないかと。それを教育と結び付けられると良い。

(千頭委員長)

ありがとうございます。大切な指摘である。
ただ、今、半田で全く無いかというと、今やっていることでもある。

(藤田委員)

現在、小中学校で環境教育や環境学習が進んでいる。以前の計画では環

境学習の推進とあったが、今回の案では「環境を学び、行動する人を増やす」と生涯学習的なイメージが入ってきた点が良い。学校や子どもだけでなく大人になって子どもが出来てはじめて環境が大切だと気付いた人なども対象になっていると思う。いつ気付いても「学び行動に移せる時がある」という広い学びを感じさせる言葉で良い。

環境に対する意識が高くない時に、一番始めにゼロカーボンが来ると「一体なんだろう」となるのではないか。市民の願いが一番に来る方が一般市民に広く受け入れられるのではないか。基本理念としては2番、3番の次に1番が来た方が良いのではないか。市民の思いが先にあって、安心して暮らせるまちを実現していくためにゼロカーボンシティにチャレンジしていくとした方が良いのではないか。順番は大事ではないか。

(事務局)

今回、ゼロカーボンへの取組というのが、基本計画を策定するにあたっての一番の課題であった。きわめて困難、長い時間をかけて取り組んでいくべきもののスタートということで、従来の安心して暮らせるまちよりもさらに取り組むべきだということで、一番前に押し出した。

(滝本委員)

ゼロカーボンシティを市長が表明したことが今回、環境基本計画の改定を行う理由となっているわけではない。かつての大規模な公害問題が収まってきており、環境の状況もそのころに比べると大変安定している。ただ、今、見えない環境問題として頻発する大型台風やオーストラリアの山火事など気候変動に起因する深刻な自然災害も頻繁に起こっていることを踏まえると、対策をしていかないといけない。これが一番始めに来るべきかどうかについては、みなさんでご議論いただきたい。

(千頭委員長)

ゼロカーボン社会が電気も使うな、物も買うなというような社会だと思われてしまうと、受け入れられない。ここで議論しなくてはいけないのは、ゼロカーボン社会の中では、私たちの毎日の暮らしはどんなものか、都市の構造や人々の働き方はどうなっているのか、絵をきちんと描くことである。それは決して嫌々ながら我慢しろという社会では実現出来ないで、ゼロカーボン社会はどんな社会なのか描けることが大事である。今はそれがない。それがないと、いきなりゼロカーボンって言われてもね、となる。その議論をどこでするか。半田市は来年ゼロカーボンの戦略を作ると聞いており、そこで、半田市での目指したい暮らし方など社会像を描くことが大切である。この計画は、その第一歩だと思う。

(田島委員)

環境像で、漢字がたくさん並んでいるのですごく分かりにくい。子どもに教える時にメッセージとして伝わりにくい。もう少し平易な言葉で、未来につながっていくようなイメージを彷彿させるような方向性のメッセージにしてはどうか。

また、現行計画の中での「知多半島の雄として」という文言がなくなっ
てしまっているので、消極的な印象を受ける。半田市は知多半島の中核
都市としてひっばっていくというところもあった方が良いでしょう。

(澤田委員)

県の立場としても、半田市は知多半島の中心的な役割を果たしていただ
くというところに期待している。前回の委員会で、現行計画では記載さ
れているが具体的に取り組んでいることはないという話だったので、現
実にやむを得ない部分もあったのではないかと。基本理念にはないが、
右上の図で「強み」として知多半島の中心都市と書かれているので、マ
インドを残してやっていこうという気概はお持ちだと解釈して期待し
ている。

(千頭委員長)

環境像は漢字ばかりが並んでいるが、漢字に直された意図は何かあるの
か。また、ゼロカーボンをあえて漢字でおいた理由はなぜか。

(事務局)

他市の計画においてもゼロカーボンの表記が多いので、その中であえて
ゼロカーボンという言葉を使わずに漢字で置いている。

(安達委員)

文字数が多くなるから漢字で置いたのかと思った。「ゼロカーボン」とカ
タカナで書いた方が分かりやすい。どこまで行っても、まだ、ゼロカー
ボンの中身が見えて来ないので、これを見ると市民は、まず「えっ？」
となるのではないかと。

(滝本委員)

実際の全国どこの市町村でもゼロカーボンシティの対策が困難で具体
策が挙げられていないと思う。最終的にどう記載するかどうかは別とし
て、この場で少し協議していただくとありがたい。

市内のバイオマス発電所での再生可能エネルギー発電量は、一般家庭の
世帯数で、1つの施設が18万世帯分、もう一つの施設が12万世帯分
と、合わせて30万世帯分ぐらいである。半田市の世帯数は5万世帯な
ので、市内世帯数の6倍程度が発電されていることになる。再生可能エ
ネルギーでカーボンフリーの電気契約をすると、電気料金は若干高くな
るが、その家庭は二酸化炭素を排出しない電力を買ったことになる。そ
れが半田市内に普及していけば、市内の一般家庭のCO2排出量は減っ
ていくことになる。

(千頭委員長)

理論上であるが、現在はそれが認められている。そこも一つの新しいチ
ャレンジの柱である。

ゼロカーボンの事が話題の中心になっているが、循環型社会、生物多様
性・自然共生社会、安心・快適社会、共創社会などについてはどうか。

4-2 を見ると大きな柱として「環境面からの農畜産業を支える」と書かれており、やはり現状にも農業に関する記載をしていただきたい。大きな柱として「環境面からの農畜産業を支える」と書かれた環境基本計画は極めて少ないと思う。ここまで書けたことは、市民経済部という市民と産業・経済が一つの部であることの強みであると思う。

(澤田委員)

4-2「環境面からの農畜産業を支える」は、具体的にどういうことを意味しているのか分かりづらい。今後の具体的な施策を次回以降に見せていただいて、その中で検討していくのかと思っている。

5つの柱で、近年の環境課題を抑えている点は良いと思う。公害が無く安心して暮らせるというところも大事にしてもらいたい。順番については今後も引き続き議論していく必要があるのかもしれない。資源循環社会について、最適消費・最小廃棄ということで、ごみを出さないという消費の所から考えていこうという視点としてはすばらしい。それを表す言葉として、3Rという言葉をあえて使わずに、最適消費が使われたのはそこに意図があるということか。

(事務局)

意図についてはおっしゃる通りである。3章以降に3Rの推進ということで、言葉を入れて説明していくのかは考えているところである。

(千頭委員長)

SDGs の中では、作る責任、使う責任という点もある。作る責任という意味においては、本当に消費から始まるだけで良いのかという問題提起をしたい。

(事務局)

半田の場合は、国に合わせてリデュースとリフューズも含めた意味での3Rとしてごみ減量に努めている。

(千頭委員長)

最適消費・最小廃棄という言葉で統一して、もう3Rとは言わないのか。その点はきちんと調整していただきたい。

(安達委員)

現状と課題、経済面の③のところで、「エネルギーの生産性は全国平均よりの低い（全国 1,719 市町村中 1,429 位）」と書かれているのに驚いた。

(千頭委員長)

出典は RESAS（地域経済分析システム）か。

(事務局)

環境省のプログラムである。

(千頭委員長)

分母が問題なのか、分子の問題なのか。要因について確認いただきたい。半田市の「環境・経済・社会」の特色・強み、の図に環境課題の解決、そしてSDGsの達成へ、と書かれているが、今回の計画の中でSDGsをどう取り扱う、あるいは取り組む予定か。

(事務局)

まず初めに、SDGs全体の考え方を示し説明する。SDGsのゴールをイメージしながら、施策の組み立てを考えていきたい。

(千頭委員長)

SDGsは17のロゴを貼るのがSDGsではない。一番大切なのは、持続可能な社会はどんな社会なのかをしっかりと描くことが必要である。それと、半田で言えばゼロカーボンシティである。環境基本計画の中で、SDGsのどこを担っていくのか、関係性をはっきりさせると良い。

(森委員)

ゼロカーボンシティという言葉が前提にあつての計画だと感じた。この計画の特徴は、基本理念の「共創」、「チャレンジ」、「市民・事業者・行政」などから、この計画を実行していく主役はみんなだということであると思う。そこを訴えていくには、専門用語や硬い言葉がたくさんあって、腹に落としにくいところがある。最終目標は2050年であり、2050年はなかなか想像しづらいところがあるが、10年後はある程度イメージしやすい。2030年に自分たちに何ができるか考えると、もっと環境を考えるきっかけが家庭生活にもあってもよい。学校教育の中での話が、家庭にも、普段の日常生活の中に環境のことを考える機会がもっと入ってくる10年にしていくために、もっと身近な言葉、身近な表現でわかりやすく説明することが大事である。そうすると環境像に漢字が多く、「みんな」というところが薄れているという印象がある。みんなで挑戦していくということが分かりやすく前面に出るような計画に仕上げたいと良いと感じている。

(千頭委員長)

半田市では現在、総合計画の改定中で、そこではチャレンジという言葉ができていて、最終は決まっていないが、その方向で議論している。半田市全体としても色々な意味でチャレンジしている。総合計画との整合性はとった上で検討しているのか。

(事務局)

当初、「チャレンジ」を入れた案を作ったが、企画当局から総合計画とは分けて考えること、と指摘があり、難しかった。

(千頭委員長)

中身の部分では、環境基本計画も総合計画の一部なので、SDGsの部分も含めて十分に調整を取っていただきたい。

1-2 で「気候変動に備える」というところでは、具体的にはどんなことを想定されているのか。気候変動への適応ということでのよいのか。国も適応計画を策定している。

他に質問・意見などなければ次に進みたい。

【事務局：冊子の説明】

(千頭委員長)

第1次計画の評価を冒頭に持ってきた方が良いのではないかと。半田市は市民の方も入ってこれまで10年間、大変きめ細かく進行管理を行ってきた。これまでの計画の流れを踏まえて、今回の施策に活かすべきである。

(事務局)

第1次計画からの継続した流れを計画書の冒頭の部分に掲載する。

(千頭委員長)

たくさん意見をいただいたので、本日の議論を踏まえて庁内でも議論していただき、総合計画との整合性も確認いただき、本日の資料のバージョンアップしたものと、具体的な施策を次回議論していただく予定である。次回の日程の予定はどうか。

(事務局)

今回は11月12日(木)の午前10時からを予定している。詳細は、別途ご案内させていただく。

(千頭委員長)

次回の資料もできるだけ早めに委員のみなさんにお送りいただきたい。委員のみなさんには少し読んでいただいて、その上で議論をしたいと思う。

(榊原委員)

大幅に改定をしたからには、今後の具体的な施策や計画の進行管理が大変になると思われる。

(千頭委員長)

事務局は本日の会議の要旨を早めにまとめてみなさんに送っていただきたい。

議題としては、以上となる。

(事務局)

先ほどもお伝えした通り、次回の委員会は11月12日に予定している。また、庁内作業部会を10月21日に開催する予定である。その議論を踏まえて計画書案をまとめる。まとまり次第、委員のみなさんに案を送付し次回、第3回委員会前に一度、意見をいただくこととし、頂いた意見

	<p>の修正を反映させた後、委員会を開催したいと思うので、よろしくお願いしたい。</p> <p>(会長)</p> <p>以上で、本日の委員会を終了する。</p>
	(終了)